三軒茶屋
教会通り

日本キリスト教団
三軒茶屋教会
https://sanchurch.jp/wp/

第63号　2021年1月発行

〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL／FAX：03-3418-4933
発行：三軒茶屋教会　広報部

確実な計画と見据えるべき不確実性

牧師　伊藤英志

このたびの感染症の世界的な拡大は、なお各地で猛威を振るっている。その深刻さの最たるものの一つは、先行きが見通せないゆえの不安が消え去る気配がないところにある。

例年通りの営みの多くが台無しになった。当たり前のことができなくなった。つまり、計画通りに進められたかつての歩みが頓挫した。

確実な計画を立て、準備を整え、それを実施し、可能であれば目標以上の成果を上げる。それは近代思想がもたらした、歴史の上では比較的新しい人間の行動様式だ。その思想が世界経済の拡大を支えてきた。

しかし、確実な計画と期待以上の成果、それが今、根底から覆されている。ここに人々は恐れを抱き不安を増し加えている。

聖書が告げる教訓と知恵は、人間が考える確実な計画は、ある時を境に瓦解し得るという不確実性と真摯に向き合うよう説いている。ノアの大洪水、バベルの塔等を語り出すまでもなく、この地上の人間の営みは、常に不確実性を帯びている。

何より、人間は死すべき存在であり、人間の一生は思っていたよりも短く、その日々に何が起こるか、その全てを予め知ることはできない。

遠い将来についても、今日、何が起こるかについても、誰にとっても一寸先は闇のままなのだ。

しかし、近代思想はそうした不確実性を可能な限り軽減させた上で、願い通りの日々を過ごせるようになる術を人間に探求させてきた。医学、経済、教育しかりである。

そのうち、社会は進歩や発展や成長という大義を掲げながら、将来の不確実性を見据えないようになった。

特に二十世紀に入ると、人々は死の現実を考えるよりも、財産を活かした余暇や娯楽によって自らを励まし慰め、気分を紛らわす生き方に価値を置くようになった。

そして、生の不確実性と敢えて向き合うように促す宗教や信仰は日常生活の隅に置かれるようになった。

二十一世紀に入り、それは全世界的な傾向となり、能力主義がもたらした格差社会が、裕福さを敵視する思想を先鋭化させた。その幕開けが大規模テロ九・一一事件であった。

その後、より多くの人々が財産形成の機会に恵まれ、望み通りの計画を立てて自分の人生の日々を確実に生きるその喜びを目指した。効率的な利益追求によって、多くの人々が移動の自由を手にし、海外旅行はより一般的となった。それはそれで素晴らしいことに間違いない。

しかし、その誰にも止められない経済活動や生活様式が、結果的に今回の感染症を全世界に広めてしまい、人々を不確実に覆われた日々に追い込んでしまった。現代では将来に対する不確実性は不吉であり悪である。

誰かの死、さらには自らの死も、縁起が悪いものとして蓋をしている。死の意味を考えずに楽に生きようとしている。

しかし、キリスト教信仰は、「この私は何者か」という自らの究極的根本を深く考えさせようとする。

人間は誰もが悲惨なほどに貪欲ゆえに罪深く、はかない存在に過ぎない。だとしても、その現実の中でこそ「生かされている自分」を見出し、今ある不確実性を越えてゆける使命と勇気、気概と意志、喜びと感謝に満ちた、生き生きと輝く生に誰もが与かれる。この確実な神のご計画を私たちも改めて見据え直したい。